

オープンガーデンにおける交換過程に関する考察

—— 着地型観光における交流の構造把握に向けて ——

土屋 薫*

要 約

「嫌消費世代」と呼ばれる層の出現は、これまで自明であった消費社会のしくみに疑問を投げかけている。地縁という地域の環から離れ、機能縁の一端である職縁が構成する産業社会、あるいはその写し鏡とも言える消費社会における商品やサービスと金銭との等価交換というしくみに馴れた人間が、それでもそのしくみ自体から距離を置くとき、いったい何をよりどころとするのか。レジャー活動を媒介とする趣味縁は、ポスト消費社会における幸福にとって大きな役割を担うと思われるが、その関係性構築においては、貨幣に替わって情報の交換が大きな意味を持つと思われる。趣味縁としてのガーデニングとその庭づくりの成果をシェアするオープンガーデンに着目すると、その担い手である庭のオーナーには一般サンプルと異なる独自の特性があることがわかった。そして、レジャー診断ツールの1つである余暇退屈度尺度 (Leisure Boredom Scale) のショートバージョン 16 項目をさらにトリミングした 8 項目短縮版を用いると、同じようにオープンガーデンを実施している場合でも、地域によって必要とされる情報に差のあることがわかった。今後は、地域特性そのものに起因する部分と趣味縁の影響による部分を峻別していくことが望まれる。

キーワード：ポスト消費社会、趣味縁、参加と距離化

はじめに

消費社会を構成している基本的な行為は、売る側と買う側がお互いの了解のうちに商品と貨幣とを交換することにある。販売とも消費あるいは購買とも呼ばれるこの行為は、交換過程という短い時間の中ではそれぞれの有するものの価値が大きく変動しないことを前提として成り立っている。消費社会で生きていくということは、この等価交換の瞬時の見極めを強いられるし、即座の見極めが難しいものは排除されていく傾向にあることを意味する。近々で思い起こされる事例を挙げれば、東日本大震災による原発事故を背景とした農業産品の風評被害のメカニズムも、こうした社会全体に拡がる暗黙のルールに端を発すると考えることができるのではないのか。

こうした消費社会のあり方は、結果として生産手段の増強をもたらすことになった産業革命の当然の帰結とも言える。だが、こうした近代化の原理に基づいたしくみが人類社会の存立にとって必ずしも本質的なものでないことは、ホイジンガの著した『中世の秋』を事細かにひもとくまでもなく、フィクションの世界においても野生に出自を持つ主人公が活躍する展開が少なくないことから容易に想像できる。

松田義幸は祝祭に基礎を置くヨゼフ・ピーパーのレジャー論を背景にして、現代社会においては、ギリシャ神話に見られるような祝祭時の神と人との交歓過程が、商業イベント時の企業と消費者との間の、商品と貨幣の交換過程に矮小化されたことを指摘している (松田 1987)。これは交換の原理そのものではなく、交換する財の変質を指摘するものである。つまり、消費社会では、その成立過程において、貨幣を媒介とした交換過程によって関係性が構築されてきたことになる。従来「職場縁」と言われていたものの背景には、単に職場

2014 年 11 月 30 日受付

* 江戸川大学 現代社会学科教授 レジャー社会学、
観光情報学

における機能や役割分担だけでなく、こうした商品と貨幣の交換過程を自明とする力学が働いている、と言えるだろう。そしてこの「産業コミュニティ」とでも呼ぶべきものは、一方で地縁に根ざした従来のコミュニティの求心力を弱めることにもつながっている。貨幣という統一的な基準の前では、地域固有の価値やルールは相対化されてしまうからである。こうした職場縁や産業コミュニティあるいは貨幣による交換は、地縁からの離脱を促す力を持つ。東京近郊のベッドタウンに居住する「〇〇都民」という存在もその証左と言えるだろう。

ところが、ポスト消費社会の到来にリアリティをもたらす「嫌消費世代」と呼ばれる層の出現は、これまで自明であった消費社会のしくみに疑問を投げかけている。もちろんそれは、必ずしも消費における交換のしくみ自体を否定するものではない。「交換に値するものが存在しない」という認識もあり得るからである。しかしそれでも疑問に思われるのは、地域的な関係性にも貨幣による等価交換にも関われない者たちは、どこで他者と関わられるのだろうか。ここで問題として浮かび上がってくるのは、地域の環から離れ、消費社会における等価交換のしくみに馴れた人間が、消費による交換を離れてもお互いに堪え得る対価物を、どのように手に入れるのか、ということである。

関係性構築のあり方について、奥村隆は「距離化」という視点から検討し、現代を「没頭（すなわち参加）を喪失した社会」と位置づけている。奥村によれば、「笑い」の場面における「ウケる／笑える」という用語は、本来笑う側に位置しながらも笑いを「評価する」（笑う対象や笑いを共有すべき相手と距離を置く）立場にいることを意味している、と言う。距離を置きながら、関係性と居場所を失っていく世界に果たして救いはあるのだろうか。

三浦展は日本における消費社会のゆくえについて、洋風化・大量消費・個性化という段階を経て、2005年以降、現在はシェア志向の「第四の消費」の段階にあると述べている。この見方にしたがえば、奥村の指摘は個性化・多様化・差別化を旨と

した「第三の消費社会」の状況を指していることになり、現在はそこから進んで「物自体の所有に満足を求める傾向は弱まって、人と人とのつながりに充足感を求める傾向が強まる」段階に来ていることになる。またそれは「お金を介さない人間関係をいかにつくるか」という方向に関心が向かいつつあることを意味する。

ここで注目されるのが趣味縁の動向である。確かに消費を中心に動いている現代社会においても趣味を通じた人間関係は存在する。また三浦が指摘するように、消費による価値交換が「買った瞬間」から目減りしていくのに比べて、「情報を交換することによる満足」や楽しさは「交換によって増幅され、継続しうる」のである。もちろんこうした傾向は一般の産業や消費だけに限ったものではなく、観光という現場においても顕在化している。それがマス・ツーリズムと着地型観光に関わる議論である。

またレジャー活動や遊びにおける「熱中や没頭」は、距離化とつながりの間を結ぶ可能性を垣間見せてくれるはずである。

1. 研究の対象と調査の方法

本研究は、趣味縁を構築していくに際して、情報がどのような媒介となりうるのか、という問題意識を出発点としている。またその際、情報の交換過程に着目している。それには、研究の対象として、情報の流通がある程度限定的なレジャー活動を取り上げることが望ましい。

そこで本研究では、趣味縁としてのガーデニングとその庭づくりの成果をシェアするオープンガーデンに着目し、その担い手である庭のオーナーと来訪する庭の見学者との間に、どのような交換過程が成立しうるのか、明らかにすることを目的とする。そのことはまた、オーナーと来訪者との交流として、オープンガーデンを着地型観光の資源として定位する結果にもつながるものである。

調査対象としては、北海道恵庭市恵み野地区と長野県小布施町と千葉県流山市で、オープンガーデンに参加しているガーデンのオーナーに質問紙

調査を行った。選定理由は、北海道恵庭市恵み野地区が日本における地域住民によるオープンガーデンの草分けであること、長野県小布施町が観光地としての側面を併せ持っている中で広く一般の町民に参加を募っていること、千葉県流山市がガーデニングクラブが主体となって運営していることによる。これらの違いから、同じオープンガーデンであっても、参加者と周辺で、やりとりされうる、また求められる情報の質に差があることを明らかにすることをねらいとした。

なお本研究は、平成 25 年度科学研究費基盤研究 (C) 課題番号 25501015, 「オープンガーデンマップの設計による観光情報の類別」(研究代表者: 土屋薫, 研究分担者: 林香織, 下嶋聖) の一環として行われたものである。

2. 調査結果

(1) レジャー活動の参加度

レジャー活動の実態を把握する手段として参加

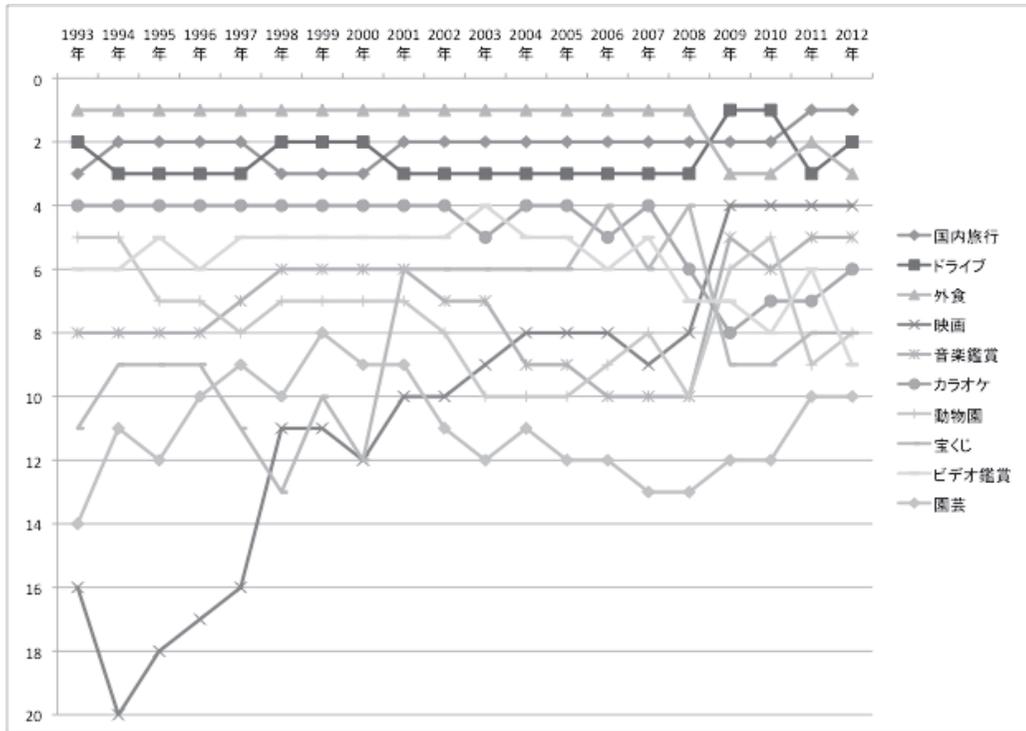


図1 過去20年の日本人のレジャー活動の推移

表1 過去20年の日本人のレジャー活動の平均順位

2012年ベスト10	過去20年間の平均順位
国内旅行	2.1
ドライブ	2.6
外食	1.4
映画	10.4
音楽鑑賞	7.3
カラオケ	4.8
動物園	7.7
宝くじ	8.1
ビデオ鑑賞	5.8
園芸	11.0

度をとらえることはある程度有効であるが、全てのレジャー活動を調査票に盛り込むことはできない。そこでここでは、財団法人余暇開発センターによってつくられた活動区分とデータを参考にすることにしたい。

図1は、2012年の日本人の参加度ベスト10に位置するレジャー活動の過去20年間の推移である。

こうしてみると、2012年のベスト10であるレジャー活動は、この20年間、必ずベスト20

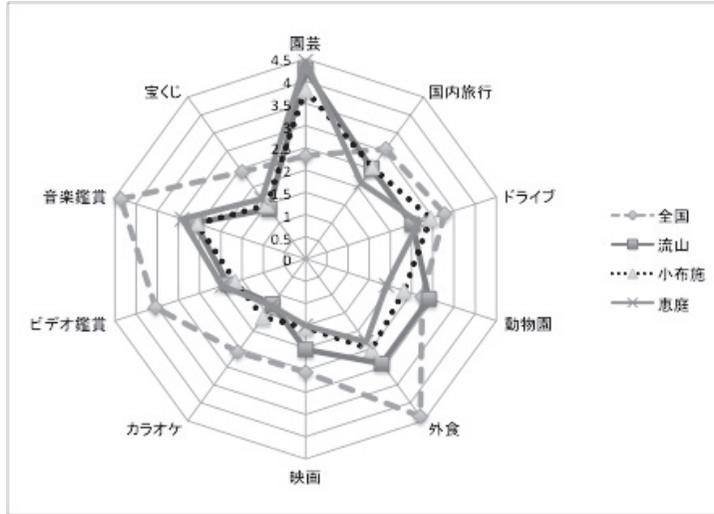


図2 レジャー活動への参加状況の比較

	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	ややそのとおりである	全くそのとおりである
私にとって、自由時間は面倒で厄介なものである。	1	2	3	4	5
自由時間があると、退屈してしまう。	1	2	3	4	5
自由時間のときには、何をしても無駄なような気がする。	1	2	3	4	5
自由時間の際、いつもやりたいことをやっているわけではないが、かといって、ほかにどうしたらいいかわからない。	1	2	3	4	5
自由時間に何かしたいのだが、何をしたらいいのかわからない。	1	2	3	4	5
自由時間の大部分を寝ることで過ごしてしまう。	1	2	3	4	5
余暇活動をそれほど楽しいとは思わない。	1	2	3	4	5
私は、余暇活動を楽しむ術(すべ)をあまり身につけていない。	1	2	3	4	5

図3 余暇退屈度の質問票

以内に位置していることがわかる。また、過去20年間の平均順位は表1のとおりである。これを見ると、ほぼ10位内外に位置しており大きな変動はない。したがって、調査項目としてこれらのレジャー活動を取り上げることにした。

調査結果をレーダーチャートとしてまとめたのが図2である。その際、調査結果を分析する上で、先行研究における同様のレジャー活動の参加度調査の結果をプロットした(澁谷・土屋 2001)。これを見ると、全国都市部のデータと比べ、本調査

の対象者にサンプルとして「趣味縁」に関わる共通した特性のあることがわかる。

(2) 余暇退屈度 (Leisure Boredom Scale) のスコアによる分析

レジャー研究の領域では、個人のレジャーの状態を捉える手段として、様々なレジャー診断ツールが研究・開発されてきた。このうち、Iso-Ahola と Weissinger の開発した余暇退屈度 (Leisure Boredom Scale) は、より少ない項目数でレジャーの働きを捉えることのできるスケールである (Iso-Ahola & Wissinger 1990, Weissinger, Calawell & Boredalos 1992)。これは主に北米大陸において尺度としての妥当性や信頼性が確認されてきているものである。当初、6つの社会的要因 (年齢, 性別, 人種, 収入, 教育レベル, 職業) と心理的要因 (職業倫理とレジャー倫理, レジャーレパートリー, レジャーの重要性の認識度, レジャーを妨げる制約の有無, 内的レジャー動機, 余暇満足度と生活満足度) の2つから構成された質問紙は、さらに16項目から成るショートバージョンに絞り込まれている。また日本においても、16項目のショートバージョンをさらに8項目にトリミングした調査研究において、その妥当性と

信頼性が確認されている (土屋・澁谷 1997, 澁谷・土屋 2001)。以下、筆者の参加した調査研究 (平成13年度私学振興財団「特色ある教育研究の推進」事業の補助金で行われた) の全国都市部住民のデータ (札幌・東京・名古屋・大阪の4地点から回収された317サンプル) と比較しながら、今回の調査結果について検討を進めてみたい。

余暇退屈度の具体的な設問は図3に示した (以下、質問項目はオリジナルの余暇退屈度の番号に合わせて、図3の上からLBS1・LBS3・LBS5・LBS6・LBS10・LBS11・LBS14・LBS15を示すものとする)。

余暇退屈度のトータルスコアの分布は高い負の歪度を示し、分布としては正規分布と言えないものであった (図3)。

また余暇退屈度の平均は、トータルスコアで12.36、標準偏差は4.14であった (表2)。各項目の最小値は点であったが、最高値は5点のグループ (LBS5:自由時間のときには何をしても無駄なような気がする, LBS11:自由時間の大部分を寝ることで過ごしてしまう, LBS14:余暇活動をそれほど楽しいとは思わない) と4点のグループ (LBS1:私にとって自由時間は面倒で厄介なものである, LBS3:自由時間があると退屈してしまう,

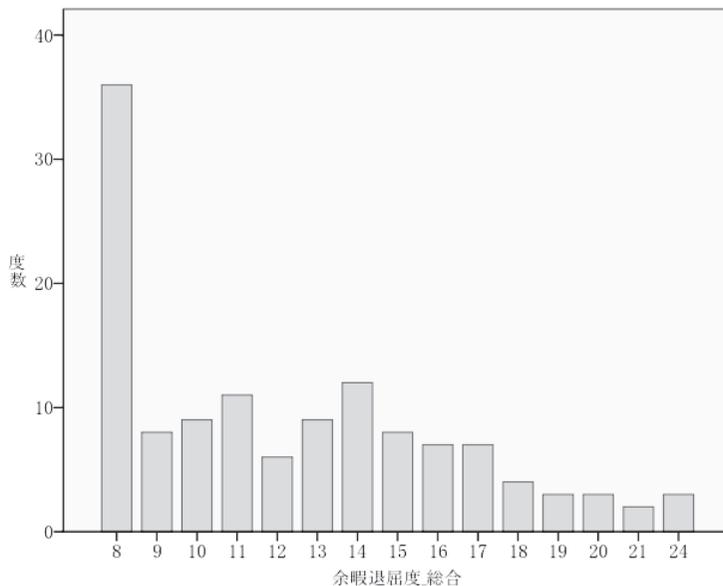


図4 余暇退屈度のトータルスコア度数

LBS6：自由時間の際いつもやりたいことをやっているわけではないが、かといってほかにどうしたらいいかわからない、LBS10：自由時間に何かしたいのだが何をしたらいいのかわからない、LBS15：私は、余暇活動を楽しむ術（すべ）をあまり身につけていない）に分かれた。内容的に見ると、前者はレジャーの持つ楽しみや価値に気づいておらず、レジャー活動を「とりあえず」行っていることを示すものである。また後者は、自分の技術力の有無にかかわるもの（LBS6・LBS10・LBS15）とレジャーの価値への気づきの入口に立

つもの（LBS1・LBS3）の2つからなると思われる。

各項目の平均は、1.46（LBS5：自由時間のときには、何をしても無駄なような気がする）から1.70（LBS15：私は、レジャーを楽しむ術（すべ）をあまり身につけていない）の間に位置していた。このことから、レジャーを楽しむ術を知らないことがレジャーを楽しめない最も大きな理由になっていることがわかる（表2）。

この調査票においては、レジャーに関して否定的な記述がされている8項目全部に、「全くその

表2 余暇退屈度の基本統計量

	LBS1	LBS3	LBS5	LBS6	LBS10	LBS11	LBS14	LBS15	余暇退屈度_総合
度数 有効	131	131	130	131	131	131	131	132	128
欠損値	6	6	7	6	6	6	6	5	9
平均値	1.53	1.63	1.51	1.66	1.46	1.47	1.46	1.70	12.36
中央値	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.50	11.50
最頻値	1	1	1	1	1	1	1	1	8
標準偏差	.727	.797	.729	.792	.671	.747	.693	.808	4.135
歪度	1.127	1.242	1.682	1.075	1.474	1.804	1.769	.767	.765
歪度の標準誤差	.212	.212	.212	.212	.212	.212	.212	.211	.214
尖度	.279	1.106	3.830	.602	2.103	3.773	4.425	-.501	-.090
尖度の標準誤差	.420	.420	.422	.420	.420	.420	.420	.419	.425
最小値	1	1	1	1	1	1	1	1	8
最大値	4	4	5	4	4	5	5	4	24

とおりで」と回答する（「レジャーは完全に退屈である」ということを意味する）と、トータルスコアは40点となる（8項目×5点満点）。また、8項目全てに「あまりそうは思わない」と回答すると16点になる計算である（8項目×2点）。このことから、平均点が12.36であることは、平均的には、回答者はレジャーを「退屈ではない」と考えていると判断できる。

また、全国都市部のデータと比較してみると、全国のトータルスコアの平均は17.96となっているので、今回の調査対象の特性として、自らのレジャーに不満を抱えている立の低いことがわかる。また標準偏差に関しても、全国データ7.92に対して、4.14となっており、全国データと比べてバラつきの少ないことがわかる。

(3) 余暇退屈度のサブスケールに関する検討

先行研究では、北米大陸において余暇退屈度は一つの独立した尺度として取り扱われてきたが、その一方で、「レジャー陰性 (Leisure Negative)」と「技術不足 (No skill)」という2つのサブスケールの存在が確認されている（澁谷・土屋2001, 土屋2006）。

そこで、今回のサンプルに関して因子分析を行った結果、表3のように1つの因子しか抽出できなかった。スケール全体の信頼性係数はクロンバックのアルファで0.85であり、独立した尺度としての一貫性を保持しているものと考えられるが、共通性に注目してみると、「LBS11：自由時間の大部分を寝ることで過ごしてしまう」の寄与率の低いことがわかる（表4）。これは睡眠というかたちで「休息」を取ることを意味するから、レジャー活動の前提条件にまで踏み込んでいるという点で、ガーデニングというレジャー活動への

表3 余暇退屈度の因子分析

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%
1	3.958	49.479	49.479	3.958	49.479	49.479

因子抽出法：主成分分析

表4 余暇退屈度項目に見られる共通性

	初期	因子抽出後
LBS1	1.000	.404
LBS3	1.000	.566
LBS5	1.000	.485
LBS6	1.000	.577
LBS10	1.000	.565
LBS11	1.000	.291
LBS14	1.000	.511
LBS15	1.000	.560

因子抽出法：主成分分析

活性度が高いと思われるサンプル特性との関係で現れて来た数値と思われる。

そこで、抽出する因子を2つに固定したところ、表5のような結果を得た。全分散は2因子で61.39%の説明力があるが、因子の内容に関しては、回転後の行列と因子成分のプロットから考えてみたい(表6・図5)。これによれば、成分1の軸に固まっているのが、LBS1・LBS3・LBS5・LBS6・LBS10の5項目である。これは内容からすると、「自由時間にはどうしたらいいかわからない」というアノミー状態としてとらえることができる。またこれらの項目とは独立して成分2の軸に位置するのが、LBS11とLBS14である。これはもはや「自由時間」ではなくレジャー活動そのものに対して意識的にネガティブな態度を取っていることになる。したがってこのプロットからは、レジャー活動の技術に関わる伝達の重要性とともに、単に技術のみならず、レジャー活動にかかわることの楽しさや意味を伝える動機づけも大きな意味を持つことがわかる。

ここで今回の調査結果について、地域別に同様のプロットを行ってみると、大きな違いのあることがわかる(図5, 図6, 図7, 図8)。恵庭は北米型に近く、ほぼ単一成分と言っても良い(図6)。いいかえれば技術の伝達によって問題が大きく解決していくことを示唆している。ただ「LBS11:自由時間の大部分を寝ることで過ごしてしまう」

表5 2因子による余暇退屈度の分析(斜交解)

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和 ^a
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%	
1	3.958	49.479	49.479	3.958	49.479	49.479	3.712
2	.953	11.915	61.394	.953	11.915	61.394	2.446

因子抽出法：主成分分析

a. 成分が相関する場合は、負荷量平方和を加算しても総分散を得ることはできません。

表6 回転後のパターン行列

	成分	
	1	2
LBS6	.828	
LBS5	.783	
LBS10	.777	
LBS3	.740	
LBS1	.649	
LBS15	.504	.376
LBS11		.909
LBS14	.194	.750

因子抽出法：主成分分析

回転法：Kaiserの正規化を伴うオブリミン法

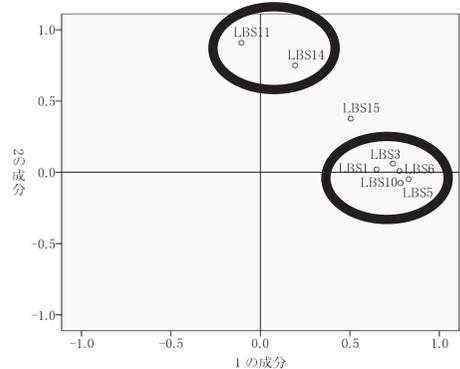


図5 余暇退屈度の成分プロット(サンプル全体)

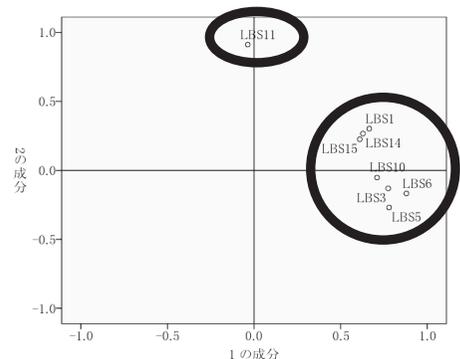


図6 余暇退屈度の成分プロット(恵庭)

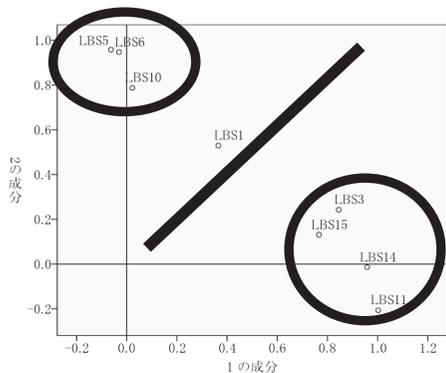


図7 余暇退屈度の成分プロット (流山)

が独立して現れて来ているのは、休息に関わる要素が大きなポイントを握っている可能性も否定できない。

流山に関しては、2の成分の高い値に位置するLBS5・LBS6・LBS10と、1の成分の高い値に位置するLBS3・LBS11・LBS14・LBS15とが、「アノミーな状態か否か」という点ではっきりと分離している(図7)。その分水嶺として「LBS1:私にとって自由時間は面倒で厄介なものである」という認識が存在している。この場合には、レジャー活動の阻害要因に関わる情報提供が大きな意味を持ってくると思われる。

小布施の場合には、1の成分に沿って、「LBS1→LBS11→LBS5→LBS3→LBS6→LBS14→LBS10→LBS15」という軸ができあがっていることがわかる(図8)。ここからわかることは、レジャー活動の技術に関わる情報伝達は、最終段階ではじめて有効に機能すると考えられることである。

おわりに

本研究では、レジャー診断ツールのうち、余暇退屈度に焦点を当てて、着地型観光の展開に向けて、適切な情報提供の指針について、オープンガーデンを実施している3つの地域を比較して検討することを試みた。その結果、地域によって必要とされる情報に差のあることがわかった。またそれは、趣味縁の構成要因によるものと予想される。今後は他の設問や診断ツールと組み合わせて、趣

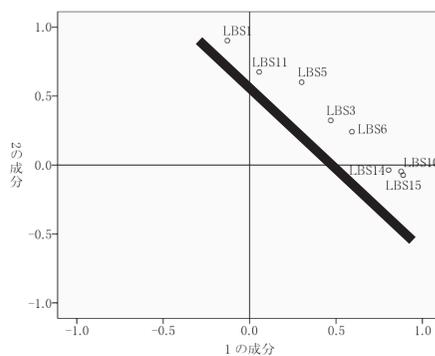


図8 余暇退屈度の成分プロット (小布施)

味縁に起因する部分と、地域特性に影響を受けている部分とを峻別していくことが望まれる。

参考文献

- 茅野宏明・中澤由夫・平岡貴子,1995,「余暇生活診断のためのツール開発に関する研究」『自由時間研究』17.
- Giddens,A., 1990, The Consequences of Modernity [松尾精文・小畑正敏訳『近代とはいかなる時代か』而立書房, 1993]
- 林香織, 2011, 「コミュニティ形成とメディア利用一流山自治会調査にみる自治会の特徴」『情報と社会』, 江戸川大学, 21号, 291-296
- 林香織・土屋薫・木村文香, 2009, 『学際的アプローチによる地域研究 - 流山コミュニティモデルの構築と大学の役割 -』江戸川大学学内共同研究報告書
- Iso-Ahola, Seppo E. & Weissinger, Ellen, 1990, Perceptions of Boredom in Leisure : Conceptualization, Reliability and Validity of the Leisure Boredom Scale, Journal of Leisure Research, Vol. 22, No. 1.
- 松田義幸(編集), 1987, 『「ゆとり」について』誠文堂新光社.
- 松田義幸, 2001, 「脱産業社会に向けての課題(1)」『実践女子大学生生活科学部研究紀要』38.
- 三浦展, 2012, 『第四の消費 つながりを生み出す社会』朝日新聞出版
- 野村一路・茅野宏明・清水やすこ・西原隆一・浮田千枝子・西麻里子, 1994, 「『余暇生活診断テスト』(LDB)日本語オリジナル版作成に関する研究」『自由時間研究』15.
- 奥村隆, 2004, 「没頭を喪失した社会—『社会学』の位置をめぐって」『応用社会学研究』46
- Pieper,J.,1965.MUSSE UND KULT. Muenchen:Koesel-Verlag, Gmbh & Co. [稲垣良典訳『余暇と祝祭』講談社, 1993].
- 佐橋由美・茅野宏明・野村一路,1997,「余暇生活設計のためのツール開発に関する研究 (II) -ILM 日本語版の信頼性と妥当性に関して-」『自由時間研究』21.
- 濵谷泰秀・土屋薫, 2001, 「余暇満足度の測定と施策展開の可能性に関する基礎的研究」『青森大学研究紀要』24巻1号

- 澁谷泰秀・土屋薫, 2001, 「余暇行動モデルの行動計量学的分析」『平成12年度私学振興財団「特色ある教育研究の推進」事業報告書』
- 土屋薫, 2001, 「都市部における余暇退屈度の特性」, 『レジャー・レクリエーション研究』45.
- 土屋薫, 2004, 「『豊かさ指標』を読み込むためのツールに関する基礎的研究」『地域社会研究』12.
- 土屋薫, 2010, 「『ガーデン・シティ』に見られる田園理想郷の系譜」『ニュージーランド研究』, ニュージーランド学会, 17巻, 19-39
- 土屋薫, 2010, 「『流山グリーンチェーン戦略』に見られる住民参加の課題」『コミュニティ政策学会第9回大会資料集-第2分科会-』, コミュニティ政策学会, 8-10
- 土屋薫, 2011, 「レジャー論から見た「オープンガーデン」に関する一考察 —千葉県流山市を事例として—」『情報と社会』, 江戸川大学, 21号, 211-217
- 土屋薫・新井正彦, 2010, 『緑化と地域コミュニティ構築の担い手に関する研究』2009年度学内共同研究成果報告書, 江戸川大学
- 土屋薫・林香織, 2010, 「GISを用いた流山市民の生活行動分析—ライフスタイルとコミュニケーションの視覚化—」『情報と社会』, 江戸川大学, 20号, 43-50
- 土屋薫・澁谷泰秀, 1997, 「レジャー行動モデルの行動計量学的分析-青森市の事例を中心に-」『平成9年度私立大学等経常費補助金特別補助事業報告書』.
- 土屋薫・澁谷泰秀, 2000, 「レジャー行動とストレスコーピング」『レジャー・レクリエーション研究』43.
- 土屋薫・澁谷泰秀, 2001, 「青森市における余暇退屈度の特性」『青森大学研究紀要』24巻2号.
- 土屋薫・澁谷泰秀, 2002, 「ストレスと余暇行動におけるニーズ形成」『青森大学研究紀要』24巻3号.
- Weissinger, E., Caldwell, L., & Bandalos, D. L., 1992, Relation Between Intrinsic Motivation and Boredom in Leisure Time, Leisure Sciences, Vol. 14.